

日蓮聖人の題目論

——佐渡前後における相違について——

丸 茂 龍 正

一、はじめに

日蓮聖人の題目論を考察するにあたり、聖人の遺文を拝読すると、佐渡流罪前と、佐渡流罪後に、題目について、説かれている事が違う事に気付く。

題目が重要であること、題目を教えの中心にしている事、又、唱題を勧める事などは、当然の事がなら、佐渡流罪の前後を通じて共通し、一貫している事であるが、そこに説かれる、題目の功德、或は、題目に具有する内容において違いがみられる。又、題目を最も重視し、聖人の宗教の中心とするところは、前後を通じて同じであっても、佐渡前においては、その強調のされ方が、佐渡後のそれとは違うのである。

これについて、先師の学説を見るに、やはり、聖人の法門において、佐渡前、佐渡後に相違のある事が指摘さ

れている。これは、一妙院日導師の『祖書綱要』によって指摘されたのを初めとし、今日において、宗学の常識とされており、題目についても同様である。

そこで、今回、日導師の説と田中智学師の説を中心に、又、田中師より後二十年も違わない宗学者、北尾日大師の説を参考として挙げ、聖人の題目論の佐渡前と、佐渡後の相違について考察したい。

日導師の説は、『祖書綱要刪略』を用いるが、日導師は、その『祖書綱要刪略』の第九「佐渡前後法門異相章」に聖人佐渡前後の法門の相違を多く述べられ、又、第七「佐渡已前未顕真実章」の冒頭で

鑽^{スル}ニ仰^ル祖書^ヲニ之要莫^ク先^ニ於識^{ヨリ}左之前後^ヲ(一)
と、述べられるとおり、この相違について、強調されている。

田中師は、日導師と同様に、佐渡前後の相違につい

て、指摘を加えながらも、その主張に、日導師と違うものがあるように見受けられ、ここにおいて、『日蓮主義教学大観』に収められている説を中心に考察していく。此等を考察し、聖人の題目論の佐渡前と佐渡後の違いを明らかにし、又、日導師と田中師の主張の違いを考察し、それによって新たに明らかになる問題点を見い出したい。

二、日蓮聖人遺文にみる佐渡前・佐渡後の題目論の相違

佐渡の前後の問題については、建治四年の『三沢鈔』に

又法門の事はさど(佐渡)の国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の経とをほしめせ(2)と、聖人御自身が指摘された事であり、この点からも、決して軽んずる事ができない事であり、それは日導師に於いても同様の指摘である。

さて、日蓮聖人の遺文において、佐渡前、佐渡後、それぞれ、題目についてどのように説かれているのか、幾つか挙げてみる。

佐渡前

一、『守護国家論』

大文第六明(中略)於此一段一向念後世為末代常没五逆・謗法・一闍提等愚人注之、略有三。一、明在家諸人以レ護持正法可レ離生死依持惡法墮三惡道。二、明但唱法華經名字計可レ離三惡道。(略)(3)

二、『法華題目鈔』

さればさせる解なくとも、南無妙法蓮華經と唱るならば悪道をまぬかるべし(4)。

三、同

南無妙法蓮華經を一日に六万十万千万等も唱て、後に暇あらば時時は弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなるやうに申給はんこそ、法華經を信ずる女人にてはあるべきに、(略)(5)

四、『十章鈔』

真実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華經なり、心に存べき事は一念三千の觀法なり。これは智者の行解なり。日本国の在家の者には但一向に南無妙法蓮華經となへさすべし。(6)

佐渡後

五、『観心本尊抄』

釈尊、因行果徳、二法妙法蓮華經、五字具足。我等受持
此五字、自然讓与、彼因果功德。(7)

六、同

是好良薬、寿量品肝要、名体宗用教、南無妙法蓮華經是
也。(8)

七、同

不レ識ニ一念三千ニ者、仏起ニ大慈悲ニ五字内裏ニ此珠一
令レ懸ニ末代幼稚頸ニ。(9)

八、『法華取要抄』

問云、如来滅後二千余年龍樹・天親・天台・伝教所
殘、秘法、何物乎。答曰、本門、本尊与ニ戒壇一与ニ題
目、五字一也。(10)

九、『報恩抄』

求云、其形貌如何。答云、(中略)三には日本乃至
漢土月氏一箇浮提に人ごと、有智無智をきらわず、
一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱へし。(11)

以上、真跡現存、或は曾存の遺文のうち九つの文を引
いたが、もちろんこれだけではなく、先師においては、
さらに現在においては偽書とされるもの、又は、真跡が
現存せず文献的に問題を残す遺文等も引かれ、その相違
を説明するのであり、従つて次の段に示す各師の指摘に

おいても、その問題は残すのである。しかし、ここに挙
げた、九つの文からも佐渡前後の法門の違いは明らかに
認めることができるのである。

佐渡前の遺文の『守護国家論』は、唱題によつて三悪
道を離れる事ができるとされ、成仏できるとは説いてい
ない。次の『法華題目鈔』では、唱題によつて三悪道を
まぬがれる事、暇あれば、弥陀の名号を唱えてもよいと
文面において許可している点に特徴があり、『十章鈔』
においては、智者の行解においては、一念三千の観法を
説いている点に特徴がある。

これに対し、佐渡後の遺文には、『観心本尊抄』にお
いて、題目の妙法五字に、釈尊の因行果徳の二法、名体
宗用教の五重玄義、一念三千が具有され、受持成仏を説
き、『法華取要抄』において、三大秘法を顕し、『報恩
抄』には、有智無智を問わず、他事を捨てて唱題をする
事を説かれている。

簡単ではあるが、このように、ここに挙げた遺文にお
いて、題目における聖人の佐渡前・佐渡後の相違は確認
できた。この相違について、先師はどのように述べてい
るのか、次の段よりみてみる。

三、一妙院日導師の指摘

日導師の説は、先述のとおり、ここでは『祖書綱要刪略』(12)の文を引いて考察したいと思う。

『祖書綱要刪略』の「佐渡前後法門異相章」において、佐渡前については『戒体即身成仏義』・『一代聖教大意』・『守護国家論』・『唱法華題目抄』・『立正安国論』・『法華題目鈔』を引き、又、その中でさらに『十章鈔』等を引き、これらの書を説明し、題目についてもそこに説かれる特徴を説明するのである。そして佐渡後については、『開目抄』・『佐渡御書』・『真言諸宗違目』・『法華取要抄』・『法華宗内証仏法血脈』・『観心本尊抄』・『諸法実相抄』・『義浄房御書』・『如説修行抄』・『顕仏未来記』・『富木殿御返事』を挙げ、同様に説明をし、その中において『撰時抄』等の文を引き、『祖書綱要刪略』の文中に

蓋佐前内ニ上行所伝ニ外託ニ台門ニ故示ニ題目功德ニ不レ等^カ(13)

とあるように、聖人は佐渡前は天台宗に附順し、従って題目の功德の示し方も等しくないという事の説明をするのである。

この説明によれば、佐渡前は、題目の功德において、

但信無解は三惡趣を免れるが、生死を出離することはむずかしい。或は、唱題によって往生成仏はできるが、即身成仏はかなわぬという事、又、所行に於いて、愚者は観念に堪えないから、止むを得ず、唱題を用うるという事、そして、法華經の題目を能説の釈尊に約して、題目の功德を述べ、法華經の説に顕れる題目の功德を述べ、法華經の説に顕れる題目に約して、久遠証得の本法の旨を顕していないこと、又、解を用うる事を示し、但信無解では六道を離れないと説かれている事、などを指摘されている。

佐渡後については、本門の三秘を顕し、等しく受持成仏ができ、無条件に即身成仏の大果を得る事、また有智無智をきらわず、他事を捨てて、単に題目を唱える事、いい、それは、久遠証得の本法であり、一分の解なくとも、信の一字を以て無明を断じ、成仏するといいい、謂る本門の題目を表されたのだと述べられている。

このように、佐渡前と佐渡後に相違がある事について、『祖書綱要刪略』にて、

所破既有^ニ淺深前後、所立那無^ニ隱顕容与^ニ而其法体始^ニ終惟一、弘^レ之勸^レ之有^ニ梯楷一耳^ハ(14)

とされ、先に挙げたとおり、聖人は佐渡前においては、

多分は天台宗に附順し、務いで内証眞実を顕さないの
あると説明されている。しかし、ここに引用した如く、
又、「佐渡已前未顕眞実章」に

然於^ニ其題目^ニ「建長開宗^{ヨリ}以至^{マテ}弘安滅度之際^ニ」
行所伝法体⁽¹⁵⁾

とあるように、建長開宗より、題目は一貫して、上行所
伝の法体であり、その前提の上に、それを内証とするが
故に、法門に次第ありというのである。

以上、日導師は佐渡前・佐渡後における法門の相違
を、具さに説き、これを「まず知るべき事」⁽¹⁶⁾と説い
ているのである。

四、田中智学師の指摘

田中智学師の佐渡前・佐渡後の相違についての指摘
は、ほぼ日導師と同じ遺文において、同様に指摘されて
おり、その骨子は大きく違いない。しかし、更に付け加
えて、佐渡前においては、因果具足の要法・寿量品を根
拠とした題目、名体宗用教の五重玄義・塔中付属の要法
であると述べていない事を指摘されている。又、今日に
おいて偽書とされる『一念三千法門』の文をもって指摘
されている項目もあるが、これについては割愛させてい

ただく。

尚、北尾日大師の指摘⁽¹⁷⁾も、佐渡前において、さら
に二期に分けるとされるが、内容は日導師の指摘とほぼ
同様である。

このように、田中師は、日導師と同様に、聖人の題目
の佐渡前と佐渡後の相違について指摘をするのである
が、田中師の強調するところ、重視する点は、別のところ
にある。田中師は論の中に次のように述べている。

一類の曲学^{*1}者は、宗旨建立の時のお題目は、佐前の
題目で、佐後の題目と内容がちがふといふが、これ
は誤ったはなしである、佐渡已前は仏の爾前経と仰
せられたのは、法門を仰せられたので、法体そのもの
の、ことではない、

法体そのものは宗旨御建立立当時から顕はされたそ
の内容の法門を隠されただけである。

聖祖御弘通の三大秘法^{*2}はもと一具の法体法門である
が、而も説必次第のゆゑにその開宣には順序があつ
た、(中略)而も一即三三即一であるから、本尊も
戒壇もみな妙法蓮華経の本尊戒壇で、この名によつ
てあらはれるのである、妙法蓮華経はこれ一大秘法
である、この一大秘法から三大秘法が顕はされたの

である、(以下略)へ*印は原文が誤植と思われ*1は典^{きやく}↓曲に、*2は一^{ほう}↓法に直してここに引用した(18)

と、題目の法体は、佐渡の前後を通じて一つであると主張されるのである。

これは、日導師も前述の如く、題目は建長開宗より上行所伝の法体であり、相違とは、外用に約すとあるのだが、日導師は特にその相違について述べられたかった、或はそこに主張があるのに対し、田中師は、法体である題目が同一である事を強調されていると思われる。

例えば、前述の引用にあるように、三大秘法の説明において、三大秘法は、佐渡前における一大秘法を開したものであるとする論も、北尾日大師⁽¹⁹⁾、藤田光肇師⁽²⁰⁾等の論文によってみられる、三即一・一即三と同様でありながらも、一大秘法の題目について、佐渡前に説かれた題目とする点に、佐渡前、佐渡後法体同一の強調がみえる。

又、佐渡前、佐渡後の分け方について、佐渡前、佐渡、佐渡後の三つに分けるべきだと主張されている。それは、前述の『三沢鈔』において、佐渡前については、爾前経としているが、『佐渡後』については、規定して

いないとし、法華経に則し、序、正、流通の三段に分け、佐渡前が序分、佐渡が正宗分、佐渡後が流通分とすべきであると述べている⁽²¹⁾。これは、佐渡前を、佐渡の正宗分の準備時代であり、佐渡前伊豆において、五義判を立てる必要があり、五義を立てたからこそ、佐渡後において、三大秘法を顕されたのだと考え、そこには、佐渡前と佐渡を切り離す考え方は全くなく、法華経を色読される聖人の、一貫した流れの中の過程である⁽²²⁾と考えるのである。

このように、田中師は、題目論において、佐渡前と佐渡後に相違は認め、日導師と同様に指摘をしながらも、変わらない法体の題目、或は、佐渡前における題目の重要性をも同時に指摘されているのだと思う。この点について、日導師とは違った主張がみられるのである。

五、小 結

以上のように、日蓮聖人の題目について、佐渡前と佐渡後の相違をみた。これにより、日導師・田中智学師が指摘するように、又、現在文献として確実とされる遺文によっても、題目の外用の相違、或は法門の相違を確認することができた。

しかし、それらを明らかにすることにより、田中師が強調する、題目の佐渡前と佐渡後に通ずる法体同一ということ。つまり、聖人が説かれる、法門には違いがあっても、説かれる題目自体は、上行所伝の題目であって、佐渡の前後で変わらないという事が、浮き彫りにされた。

これは、小松邦彰師の指摘される(23)、佐渡前換言すれば、聖人の初期と、佐渡後との関連性、共通性をみる事でもあり、題目についても同様に、佐渡の前後を通じて、変わらないもの、佐渡前の法門の中でも、佐渡後に通ずる概念、或は佐渡後に顕される法門の基本的な考え方を見い出す事であると思う。

その例は今引用した遺文の内にも認められ、例えば『十章鈔』で

常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華経なり。心に存スべき事は一念三千の観法なり。これは智者の行解トなり(24)

とあり、これは佐渡後『観心本尊抄』で顕される「一念三千を識らざる者には、(中略) 五字の内に此の珠を裹み(25)に同じとは言わないまでも、通ずる概念である」といえ、聖人が重視されたのが、一念三千である事、こ

れを題目の修行と結びつけて考えられていた事を明白に示す文であるといえるし、又、同じく『十章鈔』において、

名は必ス体にいたる徳あり(26)

では、『観心本尊抄』等に示される、南無妙法蓮華経が名体宗用教の五重玄義であるとする考え方(27)の、体についての共通する概念ではないかと考えられるのである。

このように、聖人の題目に佐渡前と佐渡後の法門に違いがあるとしながらも、佐渡前において、佐渡後に通ずる基本的な考え方、共通概念が見られ、又、法体同一という事が、先師によって指摘されている。この事に注目し、この問題を明確にしていく事が、今後の課題であると考えらる。

この問題を明確にする事で、聖人の題目論が、一面において体系化され、聖人の題目論を検討するのに、一つの手がかりとなると思うのである。

以上、次なる問題提起を含め、小結とさせていただく。

註

- (1) 本満寺發行 日蓮宗全書本『祖書綱要刪略・峨眉集』五〇頁(以下本全と略す)
- (2) 昭和定本日蓮聖人遺文 一四四六〜七頁(以下定遺と略す)
- (3) 定遺 一二五頁
- (4) 定遺 三九三頁
- (5) 定遺 四〇四頁
- (6) 定遺 四九〇頁
- (7) 定遺 七一七頁
- (8) 定遺 七二〇頁
- (9) 定遺 八一五頁
- (10) 定遺 一二四八頁
- (11) 前掲の本満寺發行 日蓮宗全書本『祖書綱要刪略・峨眉集』を使用した。
- (12) 前掲の本満寺發行 日蓮宗全書本『祖書綱要刪略・峨眉集』を使用した。
- (13) 本全 六三頁
- (14) 本全 六三頁
- (15) 本全 五一頁
- (16) 註(1)の「莫先於識佐之前後」よりその意を表した。
- (17) 北尾日大著『本化宗学綱要』一六五〜八頁
- (18) 田中智学著『日蓮主義教学大観』第四卷二七二〇頁
- (19) 北尾日大著『本化宗学綱要』一六八頁
- (20) 藤田光肇稿「論妙法五字与三大秘法關係」(『棲神』6・7号収)

- (21) 田中智学稿「佐渡前佐渡後」(『天晴会講演録』第二輯四七四〜八〇頁)に依る。
- (22) 右同 四九九〜五〇四頁に依る。
- (23) 小松邦彰稿「日蓮聖人初期の教学について」(『印度学仏教学研究』十五卷二号収)・同稿「守護国家論の一考察」(『大崎学報』一二五・六号収)に依る。
- (24) 定遺 四九〇頁
- (25) 定遺 七二〇頁 原文は漢文 註(9) 参照
- (26) 定遺 四九〇頁
- (27) 『観心本尊抄』定遺七一七頁 註(8) 参照・曾谷入道殿許御書』定遺九〇二頁に、五重玄具足の南無妙法蓮華経について説かれている。